

「表紙」

- ・ 京浜急行電鉄株式会社
- ・ 三浦半島の交流人口を増やすため、その魅力の発見とPR方法の提案
- ・ 相模女子大学
- ・ 人間社会学部 社会マネジメント学科
3年 新堀 麻由 (リーダー)
村上 詩音
鷺尾 佳澄
- ・ 田中 啓之ゼミ

「目次」

	ページ
1 はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・	1
2 三浦半島の現状と課題	
(1) 40年前と現在との比較・・・・・・・・	1
(2) 検索ワードとしての「三浦」・・・・・・・・	4
(3) フィールドワークの結果・・・・・・・・	5
3 具体的な提案	
(1) 日帰りバスツアーへの着目・・・・・・・・	7
(2) 「三浦市・城ヶ島 四季バスツアー」プラン・・・	8
(3) PR方法・・・・・・・・・・・・・・・・	9
4 おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・	10

「要旨」

三浦半島の交流人口を増やすためには、人々の興味が三浦半島に向かうことが重要である。このため、本レポートでは、「40年前と比べなぜ人々の興味が薄れてしまったのか」等、その要因分析を行った。その結果、三浦半島には魅力的なスポットが地理的に点在している一方、それらを結ぶバス便等が必ずしも便利なものにはなっていないことが要因の一つであることがわかった。このため、本レポートでは、魅力的なスポットを結ぶ「日帰りバスツアー」を提案し、当該ツアーへの参加者はもとより、当該ツアーに係る広告や、ツアー参加者の口コミ等を通し、三浦半島に既にある魅力に関する気づきを誘発し、交流人口を増やすべきことを述べた。

「本文」

1 はじめに

私たちが今回この産学チャレンジに参加したのには、ゼミの先生からの「こんなプロジェクトがあるのだけれど」の一言がきっかけだった。その中で目を引いたのがこのテーマだった。

三浦半島は、神奈川県に在住していながらも頻繁には行かない場所であり、行ったことがあったとしても小学生の遠足でしか行ったことがないという人も多い。そのような場所であるからこそ、大学生の私たちの視点から新しいものを作れるのではないかと考え参加するに至った。また、私たちが今まで学校生活を通して学んできたことを少しでも生かすことが出来ればと考えた。

2 三浦半島の現状と課題

(1) 40年前と現在との比較

私たちは今回の課題に取り組むにあたって、分析・提案の中心を、人々の足が向きにくい、半島の最南端である三浦市とした。

京急電鉄の沿線には、ペリーで有名な京急久里浜、横浜・八景島シーパラダイスのある金沢八景など魅力的な観光地があり、さらに遠くの場所である三浦市には足が向きにくい。実際に、私たちがフィールドワークで三崎口駅に降り立ってみた際、7月下旬の日曜日にしては、観光地として少々閑散としているとの印象を受けた。

人々の興味・関心の多様化、様々な観光資源の開発、交通機関の発達、車社会の出現等により、三浦市は、40年前と現在とでは、大きく変化してきている。

三浦市が誕生した頃はまぐろ遠洋漁業の拠点として賑わい、経済成長を期待されていた。本章では、その当時に遡って現在との比較をしながら、観光地としての三浦市を分析していく。

三浦市は、1955（昭和30）年1月1日に三つの町村（三崎町、南下浦町、初声村）の合併によって誕生した。人口36,687人、主な産業は漁業、農業である。現在（2015年9月1日）の三浦市の人口は、45,154人。一見増加しているようだが、増加していた時期は、市が発足してからの約40年間（1955～1994年）であり、それ以降は減少傾向にある。

昭和の時代の三浦では、ハイキングと海水浴が人気だったようだ。それを裏付けるかのように、1966（昭和41）年3月20日発行の「ブルーガイドブックス」は、三浦半島を取り上げ、13のハイキングコースを提案している。全てに共通することは、美しい景色である。三方を海と磯に囲まれているため、どのコースからでも青い海を見ることができる。また、20か所ほどある海水浴場や歴史ある燈台に立ち寄り、磯遊びや釣りも楽しむことができる。一日でもバスや徒歩、遊覧船を駆使すれば、あちこちと回ることができる広さを有する。これらは三浦半島ならではの特徴である。神奈川県では、昭和初期までに多くの海水浴場が整備された。

その後、日本が高度経済成長期に入ると、レジャーブームが起こった。それに伴って、京浜急行の線路が南部まで徐々に延長されていき、1966（昭和41）年には、観光客数は年間230万人にも及んだ。海水浴ブームが牽引役であった。景気と鉄道の拡大によって、出かけやすい環境が整ったのである。

産業は、漁業と農業という二本柱が現在も続いている。三浦と言えば「まぐろ」が定着しているが、それを牽引してきたのが数々のまぐろ料理店である。

2014年にテレビ東京系「なないろ日和！」で紹介され注目されるようになった「くろば亭」や、1872（明治5）年創業の「紀の代」など、三崎港付近には老舗の食事処が多く点在している。三浦のまぐろは、当時から安定した需要があったと考えられる。2014年のテレビ放送を機に、「健康」や「日帰り旅行」というキーワードと共に、三浦市やそのまぐろが再び注目されている。

三浦半島の内陸部で生産が続いている「三浦大根」は、この地域のブランドとして有名である。特徴は、首の部分が細く根の方が太くなる「中ぶくら」で、長さは60cmほどある。肉質は柔らかい。三浦半島での大根の栽培は、寛永の時代から続いていることが『相模風土記』で明らかになっている。そして、1925（大正14）年に今の名が正式につけられた。

かつては多く生産出荷されていた「三浦大根」だが、1979（昭和54）年の大型台風の被害にあい、代わりに生産を始めた「青首大根」が主流となっしまい、今では、三浦の大根の約99%を占めるようになった。しかし、古い歴史を持つ「三浦大根」の人気は健在である。

このように産業面を見てみると、昔と現在と様子が変わらないように思える。

一方、当時は無かった施設が、現在の三浦市の観光業を後押ししている。それが三崎フィッシャリーナ・ウォーフ「うらり」である。2001（平成13）年7

月に開業し、海産物をはじめ農産物や加工品を直売している。年間 170 万人もの人がここを訪れる。

海水浴ブームとほぼ同時期の 1968（昭和 43）年に開業した「油壺マリンパーク」は、当時では珍しかったパノラマ水槽や多種多様なサメの展示が、観光客に人気であった。

1954（昭和 29）年に開館した江ノ島水族館などと競合しながらも、三浦市の目玉として人々を引き付けてきたが、江ノ島水族館のアトラクションの増設や、1993（平成 5）年にできた横浜・八景島シーパラダイスの影響で、来場者数が減少してしまった。江ノ島水族館は、2004（平成 16）年に「新江ノ島水族館」として生まれ変わった。

平成に入ってから、油壺マリンパークは地元住民をも重視した施設となっている。水族館にドッグランを設け、ペットと過ごせることを WEB のトップページで宣伝している。

人々を引き付けつつあるものは、他にもある。昔から継承されてきた、無形民俗文化財の数々である。中でも、1976（昭和 51）年に国指定重要無形民俗文化財に登録された「チャッキラコ」という踊りがある。

毎年 1 月 15 日の小正月に三浦市三崎の仲崎・花暮地区や海南神社で、豊漁・豊作や商売繁盛などの祝福芸として、女性のみで踊られる民俗芸能の一つである。その起源は江戸時代まで遡り、『三崎志』（1756（宝暦 6）年刊行）の年中行事の項に「○初瀬踊 一名日ヤリ 十五日女兒集り踊ル」とあるので、約 250 年前から伝承されてきたことになる。1964（昭和 39）年に結成された「ちゃつきらこ保存会」によって現在も伝承されている。

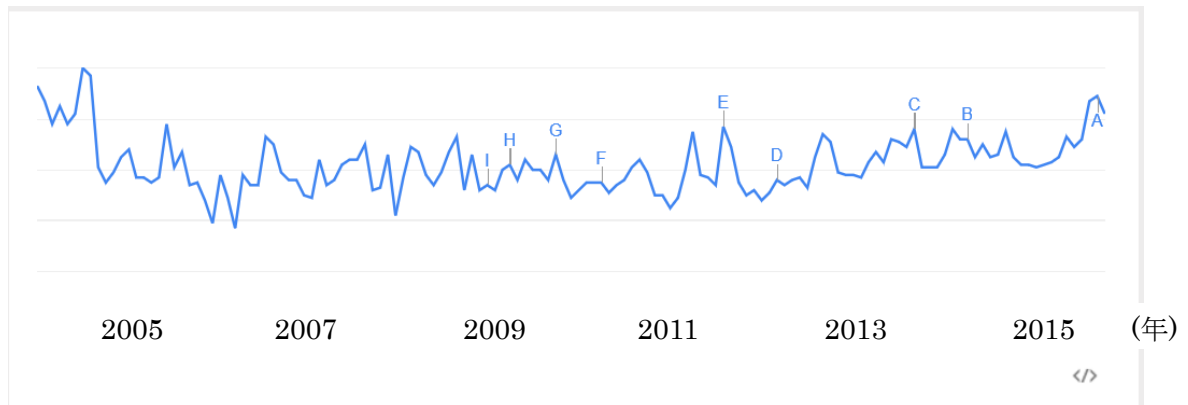
その他にも、昭和 40(1965)年代前後は、歴史的遺産の発見が相次ぎ、県指定文化財として登録された。城ヶ島は、ウミウやヒメウ、クロサギの生息地として県に登録され、赤羽海岸は、バードウォッチングの有名スポットとなり現在に至っている。

以上のとおり、鉄道の拡張により、都会から近くにある豊かな自然は、三浦市を観光地として引き立たせていった。一方、海水浴ブームは去り、油壺マリンパーク等も一時ほどのにぎわいはなくなった。新しい試みや、古い伝統の見直しがなされてきているものの、訪問者数増への効果は限定的なものに留まっている。

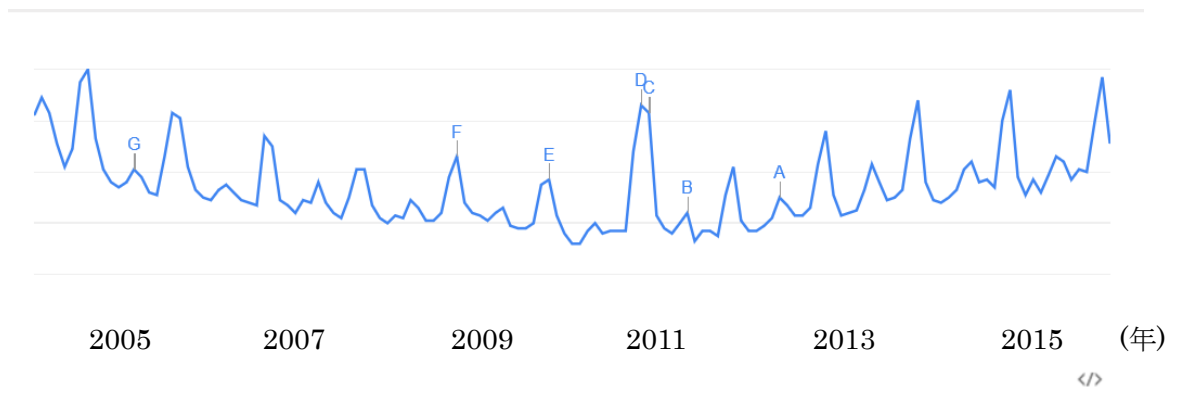
(2) 検索ワードとしての「三浦」

次のグラフは、Google Trends を用いて、「三浦」、「熱海」、「箱根」というそれぞれの単語の検索頻度を調べたものである。

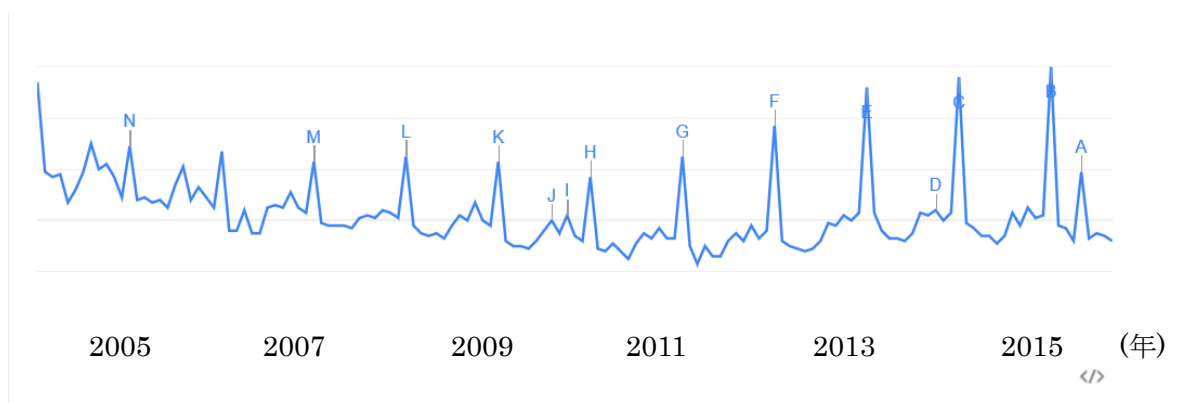
「三浦」の検索頻度 (出典) Google Trends



「熱海」の検索頻度 (出典) Google Trends



「箱根」の検索頻度 (出典) Google Trends



これらの結果から、他の地域に比べ、「三浦」の検索頻度は季節的な変化が小さいことがわかる。

(3) フィールドワークの結果

2015年7月26日(日)、横浜駅から「みさきまぐろきっぷ」を使い、三崎口まで行き、油壺マリンパーク、三崎港、城ヶ島、三浦海岸と1日巡ってみた。

まぐろきっぷのメリットは2つあると考える。

1つ目は、きっぷの値段が安いということである。横浜駅から2,960円で買え、多くの店舗から選べるまぐろ料理のお食事券、指定区間バス乗車券、レジャー施設利用券がセットになっているため、とても得なきっぷとなっている。

2つ目は、「離れた施設であっても訪ねよう」という意識が働くことである。レジャー施設利用券で指定された三浦半島の施設の1つを自ずと選び利用することとなり、その場でお土産も見て回ることとなる。まぐろ以外の海産物や野菜などへの接触機会も増える。

一方で、デメリットも2つある。

1つ目は、バスの本数が少ないため、時間を考えながら行動する必要があることである。ノープランで行くことは厳しく、あらかじめある程度のプランを立てておかなければ気軽に行くことが出来ない。

2つ目は、「大々的に宣伝されているわけではないため、認知度が低い」ということである。三浦に行く人の多くがまぐろきっぷを利用しているが、まぐろきっぷの存在自体が、一般にはあまり知られていないために、観光客の増加が一定程度に留まっているように思われる。

次に、フィールドワークの結果をふまえ、SWOT分析を行ってみた。

表：『三浦』のSWOT分析の結果

強み	弱み
<ul style="list-style-type: none">・ 景色がよい・ 駐車場が多い	<ul style="list-style-type: none">・ 公共交通アクセスが不便 (バスの乗り継ぎ等)・ トイレなどの施設が少ない
機会	脅威
<ul style="list-style-type: none">・ ドラマ等のロケ地となった場所が多い	<ul style="list-style-type: none">・ 近隣地域に競合施設等が存在 (水族館、海水浴場等)

「強み」の一つは景色が良いということだ。海岸近くにある展望台は、カップルを含む多くの人々の憩いの場所といえる。駐車場が多いため、遠方から釣りや海水浴、磯遊びに来る家族連れや団体客にも便利である。

安くて新鮮なものを手に入れることが出来る直売所も大きな魅力だ。スイカや野菜の直売所を何店舗か見つけることができる。生産量の少ない三浦大根を入手できる直売所は、人気のスポットとなっている。

「弱み」は大きく3つあげられる。

1つ目は、油壺マリンパークまでのアクセスが不便な点だ。三崎口からバスで行くのが一般的だが、終点のバス停から10分程度を歩かなくてはならない。途中で道案内も見当たらないことは、観光客に不安を与えかねない。

2つ目は、半島内の移動手段だ。移動距離が長いため、バスの利用が必要だが、本数が少ないため乗り継ぎがうまくいかず時間を持て余してしまう。

3つ目は、三浦にある施設だ。トイレがとても少なく海岸付近にもないため、数少ないトイレを見つけなければならない。さらに、掃除が行き届いておらず、入りにくい。また、三崎港周辺の店は17時頃には閉店してしまうため、人の引きがとても早く、観光地らしさに欠ける。バスまでの時間を待つちょっとしたカフェのようなものが必要である。

「機会」は、「ドラマや映画のロケ地になっている場所が多く、大々的にアピールしていけば、そのファンの人たちがロケ地めぐりをしに来るのではないか」という点である。

「脅威」は、近隣の競合施設の存在である。水族館は「油壺マリンパーク」に対して、「新江の島水族館」や「横浜・八景島シーパラダイス」が挙げられる。海水浴場は三浦海岸に対してイベントも多い由比ヶ浜、逗子、葉山、湘南の浜辺が脅威である。

3 具体的な提案

(1) 日帰りバスツアーへの着目

三浦半島には、魅力あるスポットが点在しているが、必ずしもバスの乗り換え等は便利ではないことから、それらを観光資源として生かすできていない。このため、京急グループで「日帰りバスツアー」を提供することを提案したい。

バスツアーには、宿泊を伴うものもあり得るが、①都心からそう離れていないこと、②連日開催のイベントがないこと、③宿泊施設が少ないことを考慮し、「日帰りバスツアー」が有効であると考えた。

またまぐろ切符の評判もあり、「おいしいものを食べに来ている人が多い」ことから食にも重点をおいた。

三浦市では、年間を通し数々のイベントが開催されていることを考え、「普段とは違う三浦の雰囲気をもっと多くの人に楽しんでもらえる季節限定プラン」も加えることを考えた。

主なターゲット層は、①40年前の海水浴ブームを体験した中高年世代、②パワースポットや食に興味がある主婦層に設定した。

バスツアーは、①朝の集合時間が早い、②それぞれの施設等への滞在時間が決まっている、③自ら電車とバスを乗り継ぐよりも割高となるという特徴があるが、これらのターゲット層にとっては、デメリットよりメリットが大きいと考えた。

以下、具体的なプランを説明する。

(2)「三浦市・城ヶ島 四季バスツアー」プラン

<通年プラン>

・海の幸コース（西まわり）

- ① マリンパーク・・・2時間
- ② 昼食・・・まぐろ切符提携店より 1時間
- ③ 染物体験・・・みうら大漁旗「三富染物店」 2時間
- ④ 「うらり」で買い物・・・1時間
- ⑤ 自由時間（城ヶ島散策 or 七福神の海南神社、見桃寺）1時間
- ⑥ 妙音寺散策・・・七福神のひとつ。 30分

・山の幸コース（東回り）

- ① 圓福寺散策・・・七福神のひとつ 30分
- ② 慈雲寺散策・・・七福神のひとつ 30分
- ③ 昼食・・・「菜蔵」 地産地消をテーマに地元野菜を使うお店 1時間
- ④ 海南神社、見桃寺散策・・・七福神 45分
- ⑤ 収穫体験・・・「イイジマ農園」 収穫した野菜、果物は食べるだけでなく、一部持ち帰り可能 3時間
- ⑥ 白髭神社散策・・・七福神のひとつ 30分
- ⑦ 延壽寺散策・・・七福神のひとつ 30分
- ⑧ 妙音寺散策・・・七福神のひとつ 30分

<イベント参加プラン>

春：まぐろ鉄火巻日本一寿司作り大会	3月開催
夏：三浦海岸納涼花火大会	7～8月開催
秋：三浦港町まつり	10～11月開催
冬：「うらり」年末セール	12月開催

- ① イベント参加
- ② 昼食 まぐろ丼
- ③ 散策 剣崎、城ヶ島など
- ④ 買い物 地域野菜や海産物など

イベント開催時間を考慮して①～④を組み換えることで一日楽しめるプランとする。

価格等は以下のとおりとする。

参加人数	20～40名
価格	8,000円
目安時間	7:30～18:00
出発地	新宿、品川、横浜

ツアーの価格設定を考えるにあたり、他の旅行代理店のバスツアーを調べてみた。

① 読売旅行

「焼き牡蠣、あわび食べ放題」、「さんま食べ放題」などのツアーで、料金は、9,990円程度。

② はとバス

「貝焼き・魚介類・お肉・デザートなどが食べ放題」のツアー、「マザー牧場」のツアー（10月は落花生堀り、11月はみかん狩り）で、料金は8,980～9,480円程度。

③ オリオンツアー

「いちごの里・果実畑の隠れ家ビュッフェでイタリアン食べ放題」ツアー、「巨峰1房狩り+巨峰試食付」ツアー、「ブルーベリー園内30分食べ放題+アウトレット買い物+縁結び神社参拝」ツアーで、料金は6,980～7,480円程度。

以上より、バスツアーの相場は1万円弱であり、食べ放題や季節に合わせた収穫プランが多いことがわかった。

(3) PR方法

ニコニコ動画などの動画サイトに、バスツアーの動画CMを流すこととする。その理由は、①公式サイトだけでは観覧する人が限定されるため宣伝効果が出にくく、②動画サイトのCMはテレビCMや新聞広告よりコストが抑えることができるためである。

話題性のあるユニークな動画CMを流し、その動画CMの存在が口コミで伝わるようにし、より多くの人々の関心を「バスツアー」や三浦の魅力につなげるようにする。

具体的な動画CMは、「生きたまぐろにカメラを付けておき、釣りあがった所から、出荷を経て人の口に入るまでの一連の流れ」という内容にする。まぐろの眼を通し、三浦の魅力が浮かび上がるようなものにする。

4 おわりに

私たちは、「新しく三浦に何かを作ること」で新たな魅力を生み出すという方法はとらなかった。新しいものを作ったとしても流行があり、その最先端をいく都内の有数なスポット等に負けてしまう恐れがあるためだ。

三浦に元々存在している魅力的なスポットを「バスツアー」という形で結びつけ、「都心から近いところにこんな体験ができる場所があったのだ」と気づいてもらう形にした。「バスツアー」は、電車やバスを乗り継ぐ形では味わうことが難しい体験を可能にする。訪問人口としてカウントされるのは参加者だけではない。「バスツアー」の広告を見た人々の意識に残ること、三浦半島の魅力に関する口コミを誘発すること等により、三浦半島への訪問人口が増え、観光の発展に繋がるものと考えられる。

「注釈・資料」

- ・ 本保 竣『三浦半島と南房総』ブルーガイドブックス（1966年3月20日、実業之日本社）
- ・ 三浦市「三浦市統計月報」
http://www.city.miura.kanagawa.jp/toukeijyouhou/toukei/geppou_index.html
- ・ 三浦市「ユネスコ無形文化遺産チャッキラコのお知らせ」
<http://www.city.miura.kanagawa.jp/sho-gaku/tyakkirako.html>
- ・ 三浦市農業協同組合「ダイコン」
<http://www.ja-miurashi.or.jp/tokusan/daikon.html>
- ・ 三浦じまん
<http://miurajiman.com/event/>
- ・ かながわ名産 100 選
<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f300096/>
- ・ 三浦七福神
<http://www.miura7.com/>
- ・ 読売旅行
<http://www.yomiuri-ryokou.co.jp/kokunai/detail.aspx?id=15011292>
- ・ はとバス
http://search.hatobus.co.jp/main/detail.php?id=22007&kind=s&kbn=S&course_id=h816&saikou=2&pno=1&sort=1
- ・ オリオンツアー
<http://orion-bustabi.com/kanto-feature/ranking>